

近藤紘一

妻と娘

バンコクの



バンコクの

妻と娘

近藤紘一

著者略歴

1940（昭和15）年東京生まれ。63年早稲田大学文学部仏文科卒業。サンケイ新聞社入社。静岡支局勤務を経て、67～69年フランスに留学。71～75年サイゴン特派員。現在、サンケイ新聞バンコク支局長。79年「サイゴンから来た妻と娘」で第10回大宅壮一ノンフィクション賞、80年国際報道で上田博一国際記者賞を受賞。著書に「サイゴンのいちばん長い日」「サイゴンから来た妻と娘」「野望の街」（訳書）「戦火と混迷の日々」がある。

バンコクの妻と娘

定価 980円

1980年12月5日第1刷

1981年3月15日第5刷

著 者 近藤絃一

発行者 半藤一利

発行者 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町 3-23

電話 03-265-1211（代表）

本文印刷 株式会社理想社印刷所

付物印刷 共同印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

© Koichi Kondō 1980 Printed in Japan

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

目次

娘ユンとの別離 5

バンコク暮らし事始め 31

チャニット・コート朝 65

東京からの手紙 91

バンコクのベトナム女房 131

娘ユンの転校 161

サイゴンへの里帰り 195

娘ユンの恋人 229

フレンドシップ・ブック 263

装幀
平野甲賀

バンコクの妻と娘

娘ユンとの別離

手続きは三十分たらずですんだ。

娘の通学先のリセ・フランコ・ジャポネ（日仏中・高等学校）を訪れたのは、その日の昼休み時だった。娘は、校庭の喧騒から離れて、玄関先でポツンと私を待っていた。事務所の女性職員に、校長室わきの小さな応接室に導かれた。約束の時間より十分ほど遅れて、がっしりした中背をライトブルーの背広に包んだ教務主任が、足早に姿を現わした。

「お待たせして失礼。昼休みはいつも思わぬ雑用が飛び込んできまして——」

快活に詫び、手をさし出した。

多忙を楽しんでいるような、いかにも精力的なタイプだ。

「書類審査はぜんぶ終わってます。入寮理由、健康状態、代理人の資格——何も問題ありません。むろん、当人の勉強態度、素行も申し分ない」

すぐ用件に入った。

「明日から入寮をご希望でしたね」

「ええ、できれば」

「もちろんできますとも。では、これにサインをお願いします」

私は、さし出された何枚かの書類にサインをした。

相手は、かたわらの娘をふりかえり、

「サ・バ・トワ？ ミーユン（どうだいミーユン）。最初はちょっと寂しいかもしれないけれど、なに、すぐ慣れるからね」

寄宿舎での生活規則や心構えについて、テキパキと指示を与えていた。娘もはきはきと応じている。

そのさいちゅうにも、五、六人の腕白たちが押しかけてきた。二階の窓ガラスが割れてしまった、という報告だ。

「割れたんじゃない。君たちが割ったんだ。正確なフランス語を使いなさい。とにかく皆んな残っている。この通り、私は今、お客さまの相手をしているんだ」

騒々しく叱りつけて追い出した。

「おわかりでしょう。毎日がこんな調子です。まあ、動物園の園長みたいな仕事ですな」

ニヤリと笑って、私がサインを終えた書類を受け取った。手早くめくって確認してからファイルに閉じ込み、

「さあ、これで万事完了です」

表紙をポンポンとたたいた。

「一週間後にはもうお発ちだそうですね。どうも私たち国外勤務の多いものは子供のことで気がつかいますな」

ゴロワーズをすすめ、スイスの寄宿舎にいる自分の娘たちのことを話した。

学費、寮費も馬鹿にならず、何より飛行機代が高いので、年に一度のグランド・バカンス（夏休み）しか顔を合わせる機会がない、とこぼした。

「ともあれ、寄宿舎のようすをごらんになっておきたいでしょう。生徒監に案内させます。少々、手狭で生徒たちにかわいそうなんですが、何分、財政というものがありません——」

立ちあがり、壁のインターホーンに手をのぼした。

「つだけ聞いておきたいことがあった。学業のことだ。私は娘を室外に去らせた。

「そう、そのことも考えておかなければならない」

教務主任はソファアールに戻り、灰皿の縁でゴロワーズをもみ消した。

「率直に申し上げて、ミーユンは苦勞しています。でもとても勉強熱心だし、性格も真面目だ。ちょっと真面目すぎるかもしれない……」

「だからかえって気になるんです。私は彼女のフランス語能力では次の進級は無理だと思っています。しくじってもよくよするな、いつも言っているんですが」

「——たしかに、今のところ、ボーダーラインにあります」

ちょっとあらたまった顔で、私を見た。

「あれで案外、負けず嫌いのところがあります。勉強のことで余り思い悩まれたら、性格に妙なゆがみが出ないとも限らない。とくにこれから先、私たちがそばについていてやれませんか？」

「お気持、十分わかりますよ。私たちもいっそう注意して見守ります。でも、次の進級試験までには、まだ半年以上ある。どうしても無理なようなら、そのときにまた手紙でなり、ご帰国を願うなりしてご相談しましょう。とりあえずはあまりお氣になさらないように」

私は礼を述べて立ち上がった。

「では、ボン・ボワヤージュ・エ・トレ・ボン・トラバイユ（さいさきよいご赴任を、そしてどうかいとお仕事を）」

寄宿舎は、校舎から十分ほどの、閑静な住宅街にあった。独立した建物ではなく、古ぼけたマンションの一部である。

娘の部屋は七階だった。

生徒監に導かれて室内に入り、なるほどこれはリセも相当な財政難らしい、と思った。いわゆる2LDKだ。六畳、四畳半の二室に、五、六個のカイコ棚ベッドがつめ込まれ、DKの方は、大小の勉強机、本棚、ビニール製の衣裳入れなどでほぼ満員である。

「こんどミーユンがくると総勢八人、でもベッドの方はまだ二人分余裕がありますけれど」

と、生徒監のマドモアゼル・セリューズは笑った。

日本の大学に通っているザイル出身の女性である。黒人特有のうるんだ目をした、たいそう優雅な物腰のひとつだった。

寄宿生の年齢、学年、国籍はまちまちで、年かきの連中は二十歳近いそう。娘も、もう十七歳だから、年長組に属する。国際色豊かな「女の園」と、表現できぬこともないが、どのみち、いたずら盛りの集まりだろう。室内の乱雑さから見ても、教務主任の言葉を借用して、まあ、上野動物園の分室——とでも形容しておくのが妥当かと思われた。もっとも、DKの一角をカーテンで仕切って、マドモアゼル・セリューズが起居を共にしているから、サル山の連中もそう無茶はできそうもない。

「ここに私たち寝るの」

スシづめのカイコ棚を見て、娘は少なからず、たじろいだ風だった。

「そう、はじめはちょっと窮屈かもしれないわね。でも、子供のときからぜいたくを覚えちゃいけないからね」

優雅な黒人女性は微笑みながら、励ましていた。

「サロンも狭いけれど、夜なんて皆んなで遊ぶの楽しいのよ」

起床は六時、六時半に全員そろって出かけてリセの食堂で朝食をとる。日中もずっと学校で過ごし、夕食をすませてからまた一団となって寄宿舎に戻り十時に消灯、という毎日だそう。

「ミーユンは妙に子供っぽいところがあるから、しばらくこういうところで団体生活のしかたを

「覚えた方がいいかもしれませんね」

「こいつ、ときどき横着して寝坊したり、仕事をサボったりすることがあるから、思い切り厳しく扱ってください。必要なら、物指しで引っぱたいっていただいていい」

「規則を守らせるのは私の役目です。でも、ぶつたりなんかしませんよ。ねえ、ミーユン、仲よくやりましょうね」

「ビアン・シユール（もちろん、セリユーズ」

娘はなれなれしげに答えた。

坂道を下って、九段下の地下鉄の入口まで歩いた。午後一時半だった。

「おい、ちょっと休んでいこう」

私たちは、地下鉄わきの喫茶店に入った。通りに面した窓ぎわの席に向かい合って腰を下ろした。

「何にする、ユン」

リセの先生たちやクラス仲間は、娘を「ミーユン」と呼ぶ。外国人にはこの方が名前として親しみやすいのだろう。「ミーユン」は彼女のベトナム名である。正式の日本名はただの「ユン」だ。私にとっては逆にこちらの方がなじみやすいので、家庭内の呼称も「ユン」である。

「——何でも。パパと同じもの」

ふだんと調子が違った。いつもなら目を輝かせてメニューを調べ、さんざん思案してから注文

をきめる。

私は、娘の顔を見た。相手は黙って、窓の外の車の往来に目をやっている。

ついさっきまでは、至極、快活にふるまっていたのに、私と二人だけになってから、急に雲行きがややしくなった。坂道の途中でも、ほとんど口をきかなかった。

「どうしたんだ、ユン。もう心細くなっちゃったのか」

わざと、快活な口調でたずねた。

「今晚中に荷物をまとめるんだぞ。余った分はあとでリセに運んでやってもいいけれど、パパの方も、もうあんまり時間がないからな」

ユンは、しばらくの間、私の目を真っ直ぐ見つめた。それから、

「行かないで、パパ。お願い、たのむから行かないで」

思い切ったように、低く、口早にいった。

突然、目から涙があふれだした。

私は虚をつかれ、ちよつとろうたえた。どのみち一度は愁嘆場を覚悟していたが、こうも唐突に、それも真正面からこられるとは思っていなかった。

「行かないで、って、お前……」

「お願いだから、ユンを一人で置いて行かないで」

娘はもう一度いって、子供のような顔で泣きはじめた。

私は、ひっそり泣く相手を眺めた。この娘は、笑うときは実に楽しそうに笑う。そのくせ、泣

くときはいつでもどこかで最低限の抑制を効かせている。これまで、手放しでとことん泣いた姿を見たことがない。もしかしたら、赤ん坊の頃から、泣くたびに母親に張り飛ばされてきた恐怖感が身にしみ込み、しぜん涙腺の調節能力をそなえてしまったのではなからうか、などと考えた。そのときも無言の父親の顔を、むずかしい顔と見てとったのだろう。ほんのひとしきりで、すぐ涙が引きはじめた。

私の方はまだ、当惑から立ち直っていなかった。

「一人にしないで、って……。それじゃ、お前、バンコクに来るか」

ころあいを見て問うと、

「ううん、東京にいる」

こぶしで目の下をぬぐいながら、頑固に首を振った。

「そう無理いうなよ。パパは行かなければならないんだもの。だいいち寄宿舎に残るっていいだしたの、お前じゃないか」

「ユンだってパパとママと離れて暮らすのいやだ」

「困ったな。まあ、とにかくもう泣くな」

私は運ばれてきたレモンティーのカップに手をのぼした。

「お前にそんな風に泣かれると、パパも悲しくなっちゃうじゃないか」

私がおし黙って窓外の車の列を眺める番だった。一帯は中小規模のオフィスや商店が並ぶ、雑駁な繁華街だ。

四年前、はじめて妻と娘を連れてこの店に來たときと少しも変わっていない。乾いた活氣と喧騒、そしてなにか人の心を萎えさせるような、東京の永遠の日常――。

當時、私は、前任地のサイゴンから戻ったばかりだった。住まいが定まるまでお濠ばたの小さなホテルで過ごした。近所のこの店によく、朝食を食べに來た。サイゴン赴任以前から懇意の若いマスターは、私が任地で得た妻子の顔をびくりにした目で見た。

「なんだ、ぜんぜん日本人と区別つかないじゃないですか」

來るたびに、娘に、店自慢のレモンパイをふるまってくれた。

そのマスターも、相変らず若々しい顔や襟あしからオーデコロンの香りを漂わせながら、カウンターの中を飛び回っている。店内の空氣も、大小の儲け話に熱中する客たちの表情や様子も、四年前とまったく変わっていない。

私自身同様なのかもしれない。少なくとも今ふりかえると、過去四年間の生活は、案外平板に流れ去ったように思える。しかし、妻と娘にとって、それは何かと濃密な日々であったに違いない。

外見上は、二人とも予想外に、平然と、東京での未知の生活にとけ込んだ。言葉の不自由さ、習慣作法の違い、日々の生活を規制するこまごまとした、しかし、ゆるがせにできない価値観の隔差――など、二人が乗り越えなければならなかった壁の厚さ、高さを想像すると、彼女らが示した順応性は、むしろ、驚くべきものであった。來て二カ月もたたぬうちに、すでにすっかり

と東京での生活に根をはやしたかのような彼女らの姿を見て、私は、これが女子供のたくましさか、などとも思った。

はた目には、妻の方が娘より幾分正直であった。

私たちが東京に居を移して半年余り後、彼女が生まれ育ったサイゴン（現ホーチミン市）の町は、共産軍の電撃攻撃を受けて陥落した。そして、住民の日々の生活はそれまでとまったく異なる政治社会体制下に組み込まれた。自由圏からの行き来も、ままならなくなった。妻にしてみれば、それは、ふつうの人間にとっておそらく終生の心身の拠り所である「帰属の地」を突如喪失したにひとしい変事であったはずだ。この変事にさいしても、彼女は私を心配させるほど動揺の様子を見せなかった。

ただ、妻は大家族制の風習が強いベトナムで、一族の「家長」の地位にあった。女性ながら、百人を越す直接間接の親族を一本の樹木に統率し、年々、先祖の祭りをとりしきり、その先祖の名誉のためにも、一族から食いつめ者を出さないように経済上の配慮を払ってやる義務を背負い込んでいた。その面で、サイゴン陥落の結果はひとかたならぬ重圧となって彼女にのしかかってきた。体制変革の混乱の中で多くの年老いた親族がたつきの道を失った。二、三カ月遅れで届く手紙で、彼らの窮乏ぶりを知るたびに、彼女はひどく気をもんだ。デパートの特売場で衣料や食料品、薬品を仕入れてきては、せっせと航空便で送った。老人たちの健康状態についての消息が半年も跡絶えると、目に見えて神経を消耗させた。「無事生存」の知らせが入ると、打って變つて精彩をとり戻し、また鼻歌まじりで家事にとり組みはじめる。